

「一般外来における 精神症状のみかた」

浜田 晋 著

日常診療で精神疾患に遭遇する機会が増えているが、一般医は対応に不慣れなこともあって、敬遠したりとまどうことが少なくない。この点を痛感していた私たちは「今日の外来診療」(医学書院 1989 年)で、浜田先生にアプローチの要点を執筆していただいた。これをもとに加筆し、1 冊にまとめられたのが本書である。

コンパクトながら豊富な症例を交え、とりあえずどうするか、診断・治療上留意すべき点が具体的に示されている。患者とのスタンス、精神科医との連携のとり方(紹介状・電話)、一般医の陥りやすい落とし穴など多くのアドバイスも盛り込まれている。

精神疾患というと特別な技術が思い浮かべられるが、大切なのは患者に対する豊かな共感と、きちんと体を診ることである。そのうえでいくつかのポイントを押さえることにより、一般医にもカバーできる部分が

少なくないことが全体を通して強調されている。軽症うつや仮面うつ増加、ニュータイプの神経症、老人性精神障害など精神疾患が変貌し裾野が広がった今日、もう少し積極的に受け止めてほしいという思いが発点になっていると言えよう。

同時に、医療技術者全体に精神医療を学んでほしい理由として、次のような問いかけがなされている。心身症が典型かもしれないが、1 人の患者は身体と心、更には生活環境、歴史をひっくり回して診られねばならない。このことは程度の差はあれ、今日中心になっているあらゆる慢性疾患に当てはまるのではないか。にもかかわらず、大病院の医療に代表される身体偏重の現代医療は患者の満たされない気持ちをつのらせている。更に現代医学は脳死、植物人間、ターミナルケアと、死生観(生きる意味)に踏み込むことをも迫られている。このような中であらためて医療の原点を見つめ直す作業が求

められているが、一般医学と精神医学の間に橋をかけることこそ、鍵の 1 つではないかという。

精神医療のメッカ松沢病院に育ち、精神医療の荒廃も引き金の 1 つになった医学部闘争では、学生、青年医師とともに改革を目指した(その間うつ病も体験したという)著者が上野の街かどに診療所を開いて 18 年。地域に出て精神障害、老人の心の病とかかわり、1 人 1 人の患者の生活の重みを実感できる医療や福祉を模索する中で、「町医者の復権」を提唱している。しかもその町さえも破壊され、様変わりしていくのを目のあたりにした著者の叫び、あふれる思いが行間からも伝わってこよう。

本書は一般医のための実践的なテキストであると同時に、現代医療技術批判、医療論でもある。その意味ですべての医療関係者に一読をお薦めしたいが、医療の第一線に立つ青年医師、メディカルスタッフの反応を著者は何よりも期待しているのではあるまいか。

(みさと健和病院・内科)
上林 茂暢)

● A5 変型 262 頁 1991 年
定価 3,811 円(税込) 送料 300 円

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)